

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：23302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23652014

研究課題名（和文） ドイツ語圏のゼールゾルゲにおける悲哀の理解

研究課題名（英文） Understanding of the Grief in Seelsorge of German

研究代表者

浅見 洋 (ASAMI HIROSHI)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00132598

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は日本ではこれまでほとんど紹介されてこなかったドイツのゼールゾルゲにおける悲哀の理解を紹介することである。ゼールゾルゲの悲哀理解の紹介としては、現在のドイツ語圏でよく読まれているグリーフケア文献の一つである Kerstin Lammer; Trauer verstehen, Formen-Erklärungen- Hilfen, 2004 の邦訳を刊行した。本書では、悲哀におけるゼールゾルゲの役割は心理療法的な癒しであると同時に、喪失の意味を探ることであると記されている。また、悲しみを抱える人に寄り添うために、悲哀プロセスの理解として従来の「段階モデル」に対して「課題モデル」が提示されていた。

また、本研究では S・フロイト以降の臨床心理学と日本思想における悲哀の理解の比較思想的な考察を行った。その結果、臨床心理学のアプローチでは悲哀克服の方法として「死者との関係を断ち切ること」が目標とされていた。それに対して、日本思想では「死者との関係を再構築すること」が目標とされていた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to introduce understanding of 'Grief' in German 'Seelsorge' which has been hardly introduced till now in Japan. For an introduction of the grief understanding of SeelSorge, Japanese translation published Kerstin Lammer; Trauer verstehen, Formen-Erklärungen- Hilfen, 2004 which was the one of the griefcare documents read well in modern Germany. It is written that it is to look for a meaning of the loss at the same time as a role of Seelsorge in the grief is psychotherapy-like healing in this book. In addition, "a problem model" was shown for a conventional "stage model" for understanding of the grief process to snuggle up to a person with grief.

In addition, I performed consideration of the comparison between understanding thought of the grief in clinical psychology after S. Freud and the Japanese thought in this study. As a result, "cutting off relations with the dead person" was aimed for as a method of the sorrow conquest by the approach of the clinical psychology, and, in contrast, "rebuilding relations with the dead person" was aimed for in the Japan thought.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：ゼールゾルゲ・悲哀・グリーフケア・スピリチュアルケア・死生観

### 1. 研究開始当初の背景

スピリチュアルケア (Spiritual care) の思想的源泉の一つがドイツ語圏におけるキリスト教のゼールゾルゲ (Seelsorge) であるという指摘は、平山正実、浜渦辰二、坂井祐円など、国内の精神医学や生命倫理の文献でしばしば見出すことができる。しかし、臨床パストラルケア教育研修センター所長 W. Kippes のものを除くと、医療と関わるゼールゾルゲの内容に踏み込んだ日本語文献は希である。しかし、ドイツ語圏の大学神学部や神学校の実践神学においてゼールゾルゲの学びは基本的である。ドイツ語圏の大半の中核病院はゼールゾルゲの部局をもち、カトリックの神父またはプロテスタントの牧師であるとともに臨床的なゼールゾルゲの研修と実習をつんだ魂をケアする人 (SeelsorgerIn) が、患者・家族そして医療スタッフの「魂のケア」に携わっている。

浅見は近年「終末期医療に関する住民の意識調査」「終末期の患者が表出したスピリチュアルペインの研究」のように終末期医療に関する調査研究に加えて、著書『二人称の死』や比較思想学会大会シンポジウムでの発題「グリーフケアにおける回復について—死者との関係をめぐって—」などを通して、スピリチュアルケアや死別におけるグリーフケア (grief care) の問題を取り扱ってきた。また、20、21、22 年度の夏にはハイデルベルク大学神学部実践神学ゼミナールやリーベンゼラー神学校図書館の視察やテュービンゲンの高齢者施設の訪問においてゼールゾルゲやディアコニッセに関する教育とその実践に触れた。そして、こうしたゼールゾルゲのスピリチュアルケアやグリーフケア

の紹介は、現代日本の終末期医療の展開とその宗教の関わりを考察するための重要な契機となるという確信を得た。

### 2. 研究の目的

Seelsorge (魂のケア) とは、信者の日常の悩みや問題の解決をより深い次元から、魂の救いとして導く聖職者の関わりであり、欧米諸国のスピリチュアルケア、グリーフケアの考え方や臨床にはゼールゾルゲやパストラルケアにおける宗教的要素が保持されている。それに比して、現代日本の医療現場におけるスピリチュアルケアやグリーフケアからは宗教的なものが排除される傾向がある。本研究の目的は、日本ではほとんど紹介されることがなかったドイツ語圏のグリーフケアを悲哀 (grief) に焦点をあてながら思想的に考察することである。それによって、現代日本における終末期医療・療養の再考と同時に、それらにおける宗教思想の役割を考察することができる。

### 3. 研究の方法

まず、ゼールゾルゲ関係の文献収集として、特に Seelsorgelehre (「魂のケア」に関する教科書) と Trauer (悲哀) に関する文献収集と資料整理を行い、並行して Trauer (悲哀) のケアを中心にゼールゾルゲについて記述した。それに並行して基本的なゼールゾルゲのグリーフケアを扱った書籍の日本語翻訳に着手し、それを刊行する。また、ドイツ語圏の臨床現場で働くゼールゾルガーによるグリーフワークに関する調査研究を実施する。さらに現代日本におけるグリーフケアとドイツのゼールゾルゲのグリーフケアの比較思想的考察を行う。

本期間内での具体的な研究課題はグリーフケアのあり方の解明であり、比較思想的研究はドイツと日本の比較研究に限定する。

#### 4. 研究成果

本研究の目的は、日本ではほとんど紹介されてこなかったドイツ語圏のゼールゾルゲ (Seelsorgele : 魂のケア) を悲哀 (Trauer) に焦点を当てながら紹介すると同時に、比較思想的に考察することであった。

##### (1) 翻訳書の刊行

ゼールゾルゲの悲哀理解の紹介としては、現在のドイツ語圏でよく読まれているグリーフケア文献の一つである Kerstin Lammer; Trauer verstehen, Formen-Erklärungen-Hilfen, Neukirchener Verlagshaus 2004 を邦訳、刊行した (ケルスティン・ラマー著、浅見洋・吉田新共訳『悲しみに寄り添うー死別と悲哀の心理学ー』新教出版、2013年)。本共訳書は現在ドイツ語圏で用いられているゼールゾルゲに関するテキスト的な書物としては、最初の日本語訳であり、「ゼールゾルゲの悲哀の理解」の紹介という本研究の当初の目的を果たすことができた。

##### (2) ドイツ語圏のゼールゾルゲについて

ドイツ語圏では神父や牧師を志す場合はゼールゾルゲについて深く学び、実践的訓練を受ける必要がある。危機的な状況に置かれている人々に対して、宗教者がどのように接し、支援できるかを学ぶのである。その際、カウンセリングなどの心理療法的な支援だけではなく、その人の魂とどのように向き合うかが問題になる。日本においては、死や悲しみの臨床現場において宗教と宗教者が果たすべき役割とその意義についてこれまでほとんど論じられてはこなかった。そのため、ゼールゾルゲ、パストラルケアなどは現代日本ではな

じみの少ない言葉である。

魂のケアとは、魂 (Seele) をケアする、配慮する、世話する、労わる (sorgen) ことを意味し、「魂のケア」を実践する人をドイツ語でゼールゾルガー (Seelsorger) という。

人間の心理を客観的な対象として観察し分析することを目指す精神医学や心理学といった学問は、必ずしも「魂」を扱うものではない。しかし、現代ドイツで「魂のケア」という言葉が用いられる背景には、魂の問題を人間学として捉えるキリスト的な理解がある。そのため、ドイツ語圏において魂のケアは、キリスト教会の努めの一つとして広く認められており、一般のカウンセリングなどとは区別されている。人間の魂に関わるという大切な役割である魂のケアは、特別な訓練を受けた人が担うべき働きである。ボランティアとしてケアに携わる人でも必ず一定期間の訓練を受け、また習熟したボランティアも必要に応じて再研修を受ける必要がある。

魂のケアを行うゼールゾルガーにとって特に大切な事は、寄り添い (Begleitung) と傾聴 (Akives Zuhören) の2つである。魂のケアは主に「対話」を通してなされるものである。また、魂のケアにおいては宗教儀式も大切な意味を持っている。とりわけ、死別に伴う病的悲嘆のような危機的な状況において、宗教的儀式は非常に重要な意味をもっている。また、黙って寄り添うことも大きな慰めの一つである。

##### (3) ゼールゾルゲの形成史

魂のケアという言葉が確立し、実践神学の方法論として整えられたのは20世紀に入ってからである。方法論として確立された背景にはキリスト教的伝統とともに、臨床心理学や精神医学の影響が大きい。1970年代に入り、ドイツ語圏の牧会神学は臨床心理学や精神医

学の新しい知見を幅広く取り入れはじめた。

ドイツ語圏で広く行われているゼールゾルガーの養成コース (Klinische Seelsorge Ausbildung, KSA) は、アメリカの養成コース (Clinical Pastoral Education, CPE) を模範として誕生した。CPEは1920年にアントン・ポイセン (Anton T. Boisen, 1876-1965) によって、牧師養成プログラムの一環として開始されたものであり、ドイツの養成コースでも魂のケアを実践的に学ぶようなプログラムが生まれ始めた。こうしたプログラムでは、ゼールゾルゲの指導者のもとで必ず病院や施設で患者や家族と向き合う臨床的研修が行われている。また、魂のケアに関するドイツ語圏の学際的な交流の場として、1972年に牧師や牧会心理学者、スーパーバイザーなどを中心に「ドイツ牧会心理学協会 (Deutsche Gesellschaft für Pastalpsychologie, DGfP)」が設立されている。

#### (4) ゼールゾルゲとカウンセリング

魂のケアは臨床心理的なケアに類似してはいるが、それらには明らかな違いも認められる。心理療法は、知識と経験を備えた療法家と精神疾患や心身症などに悩む人々が向かい合い、カウンセリング、治療を通してそれらの疾患、心理的問題の治癒、心身問題の改善を目指す。そのため、そこには「専門家」と「患者」というはっきりした役割が存在する。対して魂のケアにおいては、治療的な効果は求められはするが、それが最終的な目標ではない。癒しがたき傷と向き合う時、その傷の回復、癒しを求めるのは当然ではあるが、魂のケアにおいては癒しというより、その傷とともにどのように生きるかということが最も大きな課題となる。精神科医や臨床心理士による心理学的カウンセリングと宗教者による魂のケアは相反するものではなく、臨

床の場においては両方からの支援が最善だと捉えられている。心理カウンセリングで担いきれない部分をゼールゾルガーが担う必要があり、ゼールゾルガーが担いきれない部分を臨床心理士が担う場合もある。

#### (5) ゼールゾルゲにおけるグリーフケア

悲哀の出来事に際しては、喪失の意味を探すという行為において、宗教者が果たす役割は大きい。限界状況において「私とは誰か」「人生の意味とは何か」といった本質的、実存的な問いが発せられることが少なくないからである。そのような時に、人間存在の意義と人生の意味を教える宗教的なものを用いて魂のケアを行うことが求められる。昨今、医療の臨床でよく使われる「スピリチュアルケア」という言葉は「ゼールゾルゲ (魂のケア)」という言葉と概念的には非常に近いと言い得る。ただし、「スピリチュアルケア」はさまざまな宗教、ないしは宗教的なものを包括する幅の広い概念であるのに対して、「ゼールゾルゲ」はキリスト教の信仰と伝統に深く根ざした内実を持っている。それゆえ、キリスト教的伝統をもたない日本において、ゼールゾルゲのスピリチュアルケア、グリーフケアをどのように解し、どのように展開すべきかは、今後の宗教学的課題である。

2011年3月11日の東日本大震災以降、悲哀の寄り添いに関する問題に注目が集まっている。文化圏の違いがあるとはいえ、今、悲しみのなかにある人、悲しみを抱える人にどのように寄り添うべきかを考える上で、ゼールゾルゲの悲哀に対する理解とその寄り添い方から多くの示唆を得ることができるように思われる。特に、訳書『悲しみに寄り添う』では、悲しみを抱える人に寄り添うために、悲哀プロセスの理解として従来の「段階モデル」に対して「課題モデル」が提示さ

れているが、これも非常に有益な示唆の一つである。

#### (6) 比較思想的考察

さらに、併行して本研究では、S. Freud 以降の臨床心理学的な死別研究と日本思想（西田幾多郎や綱島梁川）における悲哀の理解との比較思想的な考察を行った。その結果、臨床心理学では悲哀克服の方法として「死者との関係を断ち切って、新たな関係を構築すること」が語られていたのに対して、日本思想では「死者との関係の再構築」を志向してきたことが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

(1) 彦聖美、浅見洋、ドイツにおける緩和ケアとホスピス、石川県看護雑誌第 10 巻、113-116 頁、2013、査読有

(2) 浅見洋、グリーフケアにおける死者との関係について、北陸宗教文化第 25 巻、91-108 頁、2013、査読有

(3) 浅見洋、悲哀の救いと癒やしー綱島梁川、西田幾多郎、グリーフケア、比較思想研究 38 巻（別冊）、35-38 頁、2012、査読無

〔学会発表〕（計 6 件）

(1) 浅見洋、ドイツにおける社会福祉の現状、石川県社会福祉士会能登ブロック研修会、2013 年 3 月 2 日、石川県立看護大学（かほく市）

(2) 布施晴美、糸井川誠子、大木秀一、大岸弘子、越智祐子、河原廣子、玄田朋恵、田口章子、田中輝子、天羽千恵子、志村恵、服部律子、日本多胎支援協会『子育て支援者向け多胎支援研修プログラム』について、第 27 回日本双生児研究学会学術講演会、2013 年 1 月 26 日、慶応大学

(3) 浅見洋、ドイツの高齢者施設における看取りの現状、「世俗化する欧州社会における看取りの思想的な拠り所の究明」第 1 回研究会、2012 年 6 月 30 日～2012 年 6 月 30 日、

静岡

(4) 浅見洋、生老病死／ライフコースー臨床において人生苦をいかに受け止めるかー、第 31 回医学哲学倫理学会、2012 年 11 月 17 日～2012 年 11 月 18 日、金沢大学

(5) 浅見洋、死別者と死者との関係をめぐってーGrief Care の思想的展開の一側面ー第 31 回医学哲学倫理学会、2012 年 11 月 17 日～2012 年 11 月 18 日、金沢大学

(6) 浅見洋、悲哀の救いと癒やしー綱島梁川、西田幾多郎、グリーフケア、比較思想学会北陸支部大会、2011 年 12 月 3 日、金沢市

〔図書〕（計 2 件）

(1) ケルスティン・ラマー著 浅見洋、吉田新訳、新教出版社、死別と悲哀の心理学 悲しみに寄り添う、2013、全 164 頁

(2) 浅見洋、北國新聞社、「死から生を考える」（細見博志編集）第 6 章 現代における死のイメージ、2013、担当頁 143～165 頁、全 381 頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

浅見 洋 (ASAMI HIROSHI)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00132598

##### (2) 研究分担者

志村 恵 (SHIMURA MEGUMI)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：50206223